

雑誌「顕微鏡」にみられる歯科の記載*

米長悦也 渋谷 鉦 石橋 肇 谷津三雄**

要 約

遠山椿吉氏主管の東京顕微鏡院発行の雑誌「顕微鏡」第1号から第50号までの中から、東京歯科医学院を中心とした歯科に関する記載について摘録した。歯科に関する記載は、明治29年6月発行の雑誌「顕微鏡」第11号から明治35年3月発行の第46号までに認められた。特に、東京歯科医学院の院外生のための「歯科講義録」第1号は、明治33年3月25日に発行されたものであり、しかもその広告が5日後に発行された雑誌「顕微鏡」第33号、第34号合巻に掲載されたことから東京歯科医学院と東京顕微鏡院の両者間に互いに利益をもたらしたものと思われた。さらに雑誌「顕微鏡」第38号に掲載された東京顕微鏡院の講堂の写真と、第35号に掲載された東京歯科医学院の卒業式の記事とを合わせ考えると、東京歯科医学院の第1回の卒業式が、この写真の講堂で明治33年4月21日に行われたものと考えられ、顕微鏡雑誌局発行の雑誌「顕微鏡」は、東京歯科大学史上貴重な資料を提供する雑誌である。

Key Words: 雑誌, 顕微鏡, 東京歯科医学院, 東京顕微鏡院, 遠山椿吉

はじめに

昭和36年8月20日に発行された、「東京歯科大学創立70周年記念誌¹⁾」には、次のように記載されている。

「明治32年12月高山歯科医学院の校事一切を委任された血脇守之助は、東京神田小川町にあった

遠山椿吉博士の顕微鏡院の2階を夜間だけ借り受けて、明治33年2月1日から開校した。当時の学校の財産は、机10とランプ6という極貧の状態であった。

2月1日、私立東京歯科医学院の認可を受ける。2月12日、神田美土代町青年会館で朝野の名士を集めて東京歯科医学院の開校式を挙げた。現在この日付けを創立記念日としている。

後に9月から大成中学内に移転した。」

しかし、森山²⁾、長谷川³⁾の報告によれば、血脇守之助が恩師から譲り受けたものは、学院の名義のほか、ランプ6個と机13脚だけだったとしており机の数に「東京歯科大学創立70周年記念誌¹⁾」とその記載に違いがみられるが、どちらの内容が正しいのであろうか。また、「東京歯科大学創立70周年記念誌¹⁾」の東京歯科大学年表では、高山歯科医学院時代の録事に、次のように記載されている。

「明治28年

高山歯科医学院院友会の機関紙として、『歯科医学叢談』を発行したが、明治33年5月より『歯科学報』と改題。

明治28年10月

日本全土を通じて歯科医籍に登録せられた者、286名、うち高山紀斎の門下16名、高山歯科医学院出身者66名。

明治29年7月

主事血脇守之助 高山歯科医学院改革の要を説く。」

しかし、歯科学報の項では、「歯科学報」への改題の日付を明治33年3月と記載しており、また、谷津⁴⁾も明治33年3月と記載しており明治33年5

* The Matter of Dentistry in The Microscope-The Monthly Medical Journal”

** Etsuya YONENAGA et al.: Nihon University School of Dentistry 日本大学松戸歯学部

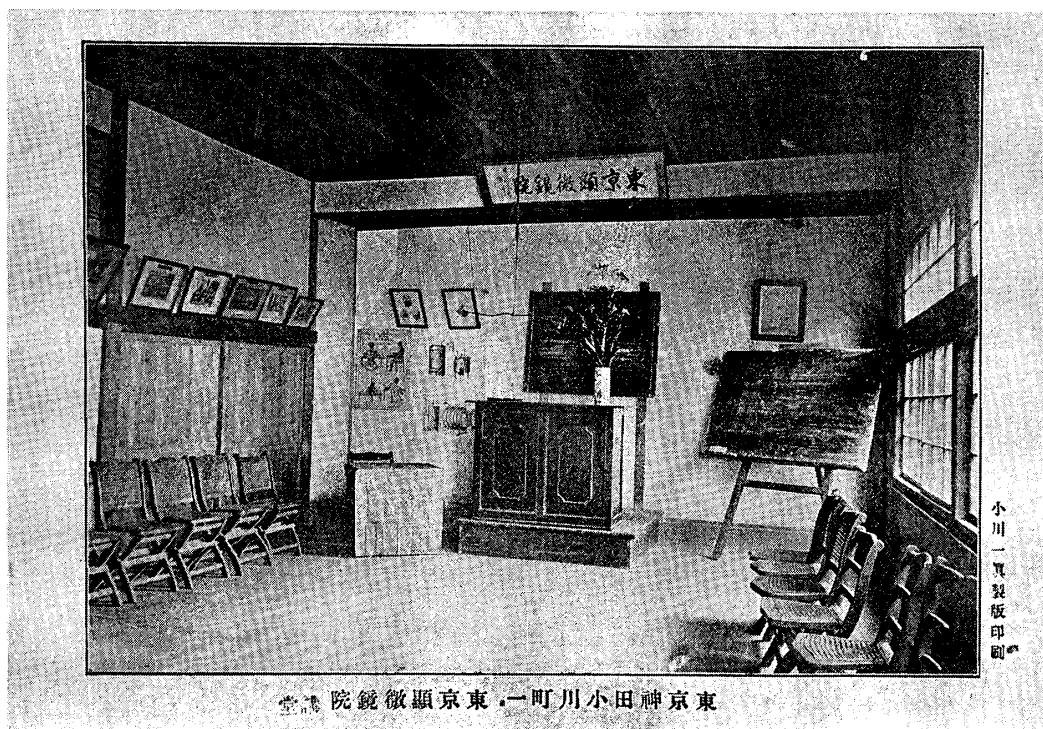


写真 1

月は、3月の誤植と考えられる。

さらに略史には、明治32年における講座の分担の中に、生理学・組織学担当者として東京顕微鏡院の遠山椿吉の名が見られ遠山は、高山歯科医学院時代から何らかの関係があったものと思われる。

東京歯科医学院時代の略史では、

「明治33年2月1日

高山歯科医学院を本年から東京歯科医学院と改称、同時に神田小川町1番地の東京顕微鏡院内に移転。

明治33年9月3日

東京歯科医学院は、神田三崎町1丁目3番地大成中学内に新たに開講する。

明治34年2月

東京歯科医学院は、現校地の神田三崎町2丁目9番地に移転。」

また、東京歯科医学院時代の録事には、明治33年東京歯科医学院時代の担当講師およびその時間が記載されているが、それによると授業は、午後6～9時の夜間に行われており、そのなかに火曜日午後6～7時の、微生物学：遠山、金曜日午後

6～7時および午後7～8時の、生理学：遠山とあり、週3時限担当していたことを知る。一方、長谷川ら³⁾によれば、金曜日の午後6～7時は、生物学の授業としており、今後この時間の授業は、生物学なのか生理学なのかを明らかにする必要がある。

遠山椿吉の人物史については、「明治人名辞典⁴⁾」によると遠山椿吉は、「山形県の産。遠山元長氏の長男にして、安政4年9月1日をもって生る。頗る微生物学に長じ、医学博士にして当時東京市立衛生試験所長たり。」と記載されている。また、「帝国医鑑⁶⁾」によると「君ハ安政4年10月3日山形県ニ生レ平民医師遠山元長氏ノ長男ナリ」とあり、生年月日に違いがみられる。さらに東京顕微鏡院については、「就学案内⁷⁾」に次のように記載されている。「本院は顕微鏡の実際応用に関する一般の学説及び技芸を講習せんと欲する者の為に講習科を設く。学科、課目は左の如し。顕微鏡の構造及使用法、附属装置、取扱法、標本製造用器械及其使用法、染料及試薬調製法、試験物採取法、各系統有形成分診断的検査法、各系統微生物診断的検査法。講習期限は3ヶ月にして、2月9

月兩期，定員を限りて募集す。学費は束修金1円，授業料毎月金2円80銭とす。」

そこで著者らは，この遠山椿吉氏主管の東京顕微鏡院発行の雑誌「顕微鏡」第1号⁸⁾（明治27年8月21日発行）から第50号⁹⁾（明治35年12月30日発行）までの中から，東京歯科医学院を中心とした歯科に関する記載について摘録し歯学史研究の一端としたい。

資 料

本誌は，22.5×15 cm で論説，纂抄，時事，講義，広告などにより構成され，80ページ内外に編集され，顕微鏡雑誌局から隔月に発行された雑誌である。著者らの一人谷津が所蔵する雑誌「顕微鏡」のうち，明治27年8月21日発行の第1号⁸⁾から明治35年12月30日発行の第50号⁹⁾までを資料とした。

歯科に関する記載内容および考証

明治29年6月18日発行の雑誌「顕微鏡」第11号¹⁰⁾の広告に，「歯科医学叢談 1年4回発行，代価郵税共一冊金拾七銭 外に向かいては，歯牙衛生の忽にすべからざるを説きて社会の曉鐘となり内に対しては新式の學術を示して斯道の本鐸となり兼ねて齒界の弊風を打破せんことを本誌の極力盡瘁する所なり 高山歯科医学院」とある。高山歯科医学院の院友会の機関紙として発行された「歯科医学叢談」について谷津⁴⁾は，明治28年10月にその第1号が発刊されたが，明治28年度はこの創刊号のみであり，同29年度には1月（第2号），4月（第3号），7月（第4号），11月（第5号）が発刊されたと述べていることからこの広告は，第3号か第4号の広告と思われる。

明治31年5月26日発行の雑誌「顕微鏡」第23号¹¹⁾の広告では，「高山歯科医学院生徒募集 9月1日学年開始，本院ハ歯科ニ関スル學術全般ヲ教授スル所ニシテ就業年限ヲ2ケ年トス，学年ハ9月1日ニ始マリ翌年6月30日ニ終ル。イツニテモ当分ノ内無試験入学ヲ許ス。入学金 2円 授業料 1円80銭，実地撰科生ハ，1円トス，詳細ノ規則書ヲ望マバ，2銭郵券ヲ送ルベシ」が見

られる。当時の高山歯科医学院は，米国の入学時期にならって9月入学であったと思われる。なお，明治31年9月19日発行の雑誌「顕微鏡」第24号，第25号合巻¹²⁾の広告にも同文の広告が掲載されている。

明治32年5月31日発行の雑誌「顕微鏡」第29号¹³⁾に，「歯学研鑽」第2号 5月26日発行の広告が1ページをさいて掲載されている。その内容は，「目次●祝歯学研鑽発刊，河村利次郎氏●歯学研鑽ノ発刊ヲ祝ス，藤井和三郎氏●顕微鏡写真及図解自5号至8号◎論説●『カタホレシス』ニ使用スル溶解性導子，富安晋述●歯髓ヲ腐食セシムル方法ニ就イテ，小川勝一述●牙質知覚過敏症，辻康太郎氏訳●口腔内『エスチェリックバシリユス』（普通大腸菌）ノ存在，荒木盛英氏訳●枯死歯髓石ノ実験，野間式秉氏●結核伝染ニ特殊ノ関係ヲ有スル二百二十人ノ口腔ニ於ケル細菌学的研究，ジー，ダフリュウ，クック氏●歯髓ニ於ケル神経ノ分布（承前）ジー，カール，ハウバー氏●『カタホレシス』（承前）チェーン，エム，フォック氏◎撮録●不注意ナル母●易鎔合金ノ三種●結麗亜曹篤ト日光●根管ノ倔苔百兒加ヲ除去スル法●露出セントスル歯髓上ニ存スル牙質ノ消毒●器械ノ錆ヲ除ク法●歯髓腐食ニ用フル亜砒酸●金盞花及其特質●唾液分泌ノ過量ヲ防ク法●舌ノ亀裂●唾液中ノ硫青酸含有量●歯牙ノ数●顕微鏡写真ニ用ユヘキ顕像薬●顕像薬中ノフォルマリオン●過硫酸安謨尼亞ニ就テ◎雑録 数件◎付録 美氏口腔細菌学，小川勝一訳述●歯科衛生論 富安晋講述 定価 郵税共一冊金十五銭●六冊分前金八十五銭●十二冊分前金壹円六十五銭発行所 日本橋区薬研堀町29番地 富安歯科治療所」と記載されている。

「歯学研鑽」は，富安晋が主管で毎月1回発行したが，2年後に不定期となり，同39年8月の第7巻第3号で終刊となっている。この雑誌の特徴は，歯科顕微鏡学を付録として毎回詳細な顕微鏡写真を口絵として掲載している⁴⁾ことであり，医学雑誌「顕微鏡」と類似する歯学雑誌であった。このようなことから本誌の創刊号¹⁴⁾の巻頭に「祝歯学研鑽発刊 遠山椿吉氏」が掲載されたものと

思われる。なお、本誌の誌名は、歯科あるいは歯科医学に対して歯学という用語を使用した最初のものである⁴⁾。

「歯学研鑽」の第1号¹⁴⁾は、明治32年4月5日の発刊であり、したがって同年1月30日発行の雑誌「顕微鏡」第27号¹⁵⁾にその広告が掲載されなかったのは当然としても、4月9日発行の第28号¹⁶⁾に何故「歯学研鑽」の創刊号の広告が掲載されなかったのであろうか、その後の明治33年5月31日発行の雑誌「顕微鏡」第29号¹³⁾には、同年5月26日発行の「歯学研鑽」第2号の広告が「歯学研鑽」としては初めて掲載されていることと比較すると、「歯学研鑽」の創刊号¹⁴⁾は、しかるべき機関への献本のみであったのかまたは、創刊号の売れ行きが悪かったために第2号の広告をだして宣伝をはかったもののいずれかと解されよう。なお、奥付によれば雑誌「顕微鏡」の、1ページの広告料は、当時2円であった。

明治33年3月30日発行の雑誌「顕微鏡」第33号、第34号合巻¹⁷⁾では、初めて神田小川町1番地東京歯科医学院の名称を使って、歯科医学生徒募集と、歯科講義録の案内が掲載されている。この広告は、血脇守之助が学院継承にあたり、校名を「東京歯科医学院」とし、神田小川町1番地の遠山椿吉氏の東京顕微鏡院の教室を夜間だけ借り受けて明治33年2月1日に開校した¹⁾という東京歯科大学史を裏付けるものである。

歯科医学生徒募集には、「●高山歯科医学院は、明治23年の創立にして爾来歯科医を世に紹介すること200余名 今回東京歯科医学院と改称し左記へ移転のうえ、大に規則を改正し益々歯科医の養成に力めんとす●本院は、欧米歯科大学の学制に倣い歯科医に必要な学術を教授す●当分無試験入学を許す●卒業2ヶ年●授業時間自午後6時至9時、卒業生は、米国歯科大学3年級に入学するの資格あり●束脩金 3円、授業料金2円●別に撰科生の設けあり普通医学生の傍ら歯科治術を学ばんと欲する者の為 頗る便利なり●授業料1科金50銭」とある。「東京歯科大学創立70周年記念誌¹⁾」および長谷川ら³⁾によれば、高山歯科医学院の卒業者数は、53名であり広告の200余名と

は異なる。このことは、卒業しなくても歯科医術開業試験に合格すれば良い時代であったためであろう。さらに高山歯科医学院時代の入学金2円、授業料1円80銭に比べて、東京歯科医学院では束脩金3円、授業料金2円となり、この束脩金とは入門料のことなので入学金と考えてよく、東京歯科医学院になって、値上げのあったことがわかる。また、歯科講義録の項には、「●3月25日第1号発行●院科者の為、本院講義録を発行す●講義録には本院前後期は勿論外科講演をも記載す●講義録は頗る詳細明了にして一読 歯科医全般を究むるに足る。講義録は独習用及び受験用として絶好なり●普通医科の歯科治術を修め臨床上の参考となさんと欲するものには、頗る便利なり、卒業15ヶ月●卒業生には修業証を付与し本院院友となす●束脩金50銭、月謝金1円●毎月1回発行●1冊2百頁内外●卒業生は●無試験にて第2年級に編入す●規則望の者は、2銭巻を送れ」と記載されている。院科者は、院外者の誤植でありこの院外者のための「歯科講義録」の発行については、「東京歯科大学70周年記念誌¹⁾」の年表に明治33年3月とのみ記載されているが、森山ら¹⁸⁾が報告するように、明治33年3月25日にその第1号が発行されたことを知る。しかも、その広告が5日後の同年3月30日発行の雑誌「顕微鏡」第33号、34号合巻¹⁷⁾に掲載されていることは、東京顕微鏡院に間借りしていたことと雑誌「顕微鏡」が合巻であったということから、両者間に互いに利益をもたらしたものである、と同時に学院の継承を終えた血脇は、院務に精力的に励んだ²⁾とされることから、血脇守之助は東京歯科医学院の学生募集と歯科医師開業試験用の「東京歯科医学院講義録」(明治33年3月から同35年6月までの16冊²⁾)の発行に必死の努力を傾けていたことを思わせる。なお、森山ら³⁾によれば、遠山椿吉は、この講義録の第1号では生理学を担当し、細菌学を講述している。またこの講義録の全巻を通じての講師としては微生物学総論(毒は菌の誤記)を担当していたと報告している。なお、当時の3大医学雑誌は、「東京医事新報」、「医事新聞」ほか「中外医事新報(後に日本医史学雑誌に改題)」であ

った。また、普通医科の歯科治術を修め臨床上の参考となさんの記載は、当時小幡英之助、高山紀斎や伊沢信平などが、医学を修めてから歯科医業を行なったといういきさつと、歯科医師法の成立（明治39年5月2日）以前のことであり⁴⁾とはいえず、本報告は今昔の感が深い。

明治33年5月20日発行の雑誌「顕微鏡」第35¹⁹⁾号38ページには、「東京歯科医学院卒業式 神田小川町なる同院にては去る21日午後3時より同院講堂において第8回卒業証書授与式を挙行せられ、血脇院長の告示、青山講師の演説、卒業生総代の答辞、来賓諸氏の演説等あり茶菓の饗応ありたり。」と記載されている。一方、明治33年11月30日発行の雑誌「顕微鏡」第38号²⁰⁾には、東京顕微鏡院の講堂の写真（写真1）が掲載されており、明治33年5月の時点では東京歯科医学院が、まだ東京顕微鏡院内にあったこと、および「東京歯科大学創立70周年記念誌¹⁾」では、東京歯科医学院の第1回卒業式は明治33年4月と記載されているので、明治33年4月21日に東京歯科医学院の第1回の卒業式が、写真に示すこの講堂で行われたものと考えられ、東京歯科大学史上貴重な資料である。

明治33年5月発行の雑誌「顕微鏡」第35号¹⁹⁾および明治33年7月発行の第36号²¹⁾には、寄贈雑誌目録に「歯学研鑽」の誤植と思われる「歯科研鑽」の記載が見られる。このことは今日医学に対し歯学、薬学という言葉が一般的になったが、この当時は歯科の名称が一般的で歯学は斬新的な用語であった⁴⁾ことを物語るものである。さらに明治33年11月発行の雑誌「顕微鏡」第38号²⁰⁾の交換雑誌には、歯学研鑽、歯科学会月報、歯科学報の3誌が記載されているが、そのうち歯科学報の出版社が医科学報社と誤植されている。

明治34年3月発行の雑誌「顕微鏡」第40号²²⁾の広告には、「移転東隣9番地 血脇守之助 神田三崎町2丁目9番地」と記載され、「東京歯科大学創立70周年記念誌¹⁾」に見られる、「その年の暮れ、診療所の隣家（現在の校地）で、当時有名な実業家平岡熙の広大な土地（約680坪）、屋敷、洋館及び附属小家を手に入れた。」を裏付ける広告

である。さらに同ページには、「生徒募集 4月1日新学期開始 歯科講義録毎月1回発行 在外者独習書にして一読歯科医学全般を究むるを得へし○卒業15ヶ月○月謝老円 束脩五拾銭○第拾号既刊以下取揃あり何時にても申込に 応す○規則書望の方は郵券二銭を送れ 神田区三崎町二丁目九番地 東京歯科医学院」と高山歯科医学院時代とは異なり日本式の4月入学になったことを知る。さらにこの広告に続いて、「歯科医術開業試験問題答案集定価1円郵税8銭 歯科学報 毎月1回発行 1冊15銭郵税5厘 神田区三崎町二丁目九番地 歯科学報社」と記載されている。この「歯科医術開業試験問題答案集」全は、東京歯科学報社編輯で明治33年7月15日初版、同38年2月20日第3版発行で、編集人奥村鶴吉、朝陽堂書店、南山堂書店から発売され当時のベストセラーであった。さらに下段には、「歯学研鑽第2巻第1号 1月既刊毎月1回25日発行（代価1部金15銭◎6部前金85銭◎12部前金1円65銭）歯学研鑽創刊以来往々発行の期に後れ読者諸君の眷顧に背くと慚なからさりしが今や吾邦歯科医学は20世紀の曙光に接して漸く有望なる青年期に達せると共に吾人の覚悟も亦自ら一新せざるを得ざるに至れり則ち当年1月発行の分より第2巻と改め以後毎月発行情日を厳守すへきのみならず益々紙面を改良しもって斯学の発達に盡瘁せんとす大方研鑽の士希くは之を愛読せよ 東京市日本橋区薬研堀町29番地 発行所 富安歯科治療所（電話浪花1287番）同市日本橋区本町2丁目6番地 北沢商店事 大売捌 武田辰之助（電話本局348番）」と記載されており、発行が後れがちであったが、やっと明治34年に第2巻を発行したものの、その後は不定期となり明治39年8月の第7巻第3号で終刊となった⁴⁾という史実を裏付ける広告である。

その後は、歯科関係の掲載が減少し明治35年発行の雑誌「顕微鏡」第50号⁹⁾までの中では、交換雑誌の記載を除いては、わずかに明治35年3月発行の第46号²³⁾に「歯科学報」と「歯学研鑽」の広告を見るのみである。その内容は、「歯科学報 定価1冊金18銭○6冊金1円○12冊金2円全国無通送料 毎月1回発行（第7巻第3号既刊）歯科学

報の内容は ○論説治験 ○雑抄○寄書○雑報の諸欄に分ち有益他趣なる諸項を掲載し開業医の好侶伴歯科医学研修の良羅針たり 東京市神田区三崎町2丁目9番地 発行所 歯科学報社」であり1年で1冊3銭の値上げであったことを知る。また、「歯学研鑽 1部金15銭◎6部(半年分)前金85銭◎12部前金1円65銭 毎月1回25日発行(第3巻第1号既刊) 歯学研鑽 ハ本年発行の第3巻第1号より多少紙面に改良を施し掲載の事項を◎歯学研鑽◎論説◎学会◎参考室◎撮録◎通信◎雑録◎投書室の諸欄に分ち且毎号添ふるに顕微写真其他有益なる挿図を以てし開業医と学者とに等しく歯科医学研究の資料を供せんとす江湖の諸君請う愛読あれ 東京市日本橋区薬研堀町29番地 発行所 富安歯科治療所(電話1287番)」と「歯学研鑽」では、紙面に改良が加えられたこと、および明治32年以来値上げがなかったことなどを知る。

なお、“顕微写真其他有益なる挿図を以てし開業医と学者とに等しく歯科医学研究の資料を供せんとす”とあるが、はたして当時の開業歯科医は顕微鏡をどの程度に臨床に応用していたのであろうか。

おわりに

雑誌「顕微鏡」第1号⁸⁾から第50号⁹⁾までの中で、歯科に関する記載は、明治29年6月発行の第11号¹⁰⁾から明治35年3月発行の第46号²³⁾までに認められた。特に、東京歯科医学院の院外生のための「歯科講義録」第1号は、明治33年3月25日に発行されたものであり、しかもその広告が5日後に発行された雑誌「顕微鏡」第33号、第34号合巻に掲載されたことから東京歯科医学院と東京顕微鏡院の両者間に互いに利益をもたらしたものである。さらに雑誌「顕微鏡」第38号²⁰⁾に掲載された東京顕微鏡院の講堂の写真と、第35号¹⁹⁾に掲載された東京歯科医学院の卒業式の記事とを合わせ考えると、東京歯科医学院の第1回の卒業式が、この写真の講堂で明治33年4月21日に行われたものと考えられ、顕微鏡雑誌局発行の雑誌「顕微鏡」は、東京歯科大学史上貴重な資料を提供す

る雑誌といえる。

文 献

- 1) 学校法人 東京歯科大学編：東京歯科大学70周年記念誌，学校法人 東京歯科大学，東京，1-5，18-20，218-221，昭和36年。
- 2) 森山徳長(中原 泉編)：血脇守之助(歯科医学史の顔)，201-211，学建書院，東京，1987。
- 3) 長谷川正康，森山徳長，石川達也，高添一郎：東京歯科医学院の学制・教授陣・教科書等について，日本歯科医史学会会誌，14：89-96，1987。
- 4) 谷津三雄(鈴木 勝監修) 歯学史資料図鑑一目で見る歯学史一，第2版，医歯薬出版，東京，244-418，1980。
- 5) 高野義夫：明治人名辞典 上巻，東京，日本図書センター，1987年10月。
- 6) 河野二郎：帝国医鑑，との部 6，東京旭興信所，東京，明治43年5月。
- 7) 大橋新太郎：就学案内(日用百科全書第37編)，博文館，東京，181-182，明治32年4月。
- 8) 顕微鏡雑誌局：顕微鏡 第1号，明治27年8月21日。
- 9) 顕微鏡雑誌局：顕微鏡 第50号，明治35年12月30日。
- 10) 顕微鏡雑誌局：顕微鏡 第11号，明治29年6月18日。
- 11) 顕微鏡雑誌局：顕微鏡 第23号，明治31年5月26日。
- 12) 顕微鏡雑誌局：顕微鏡 第24号，第25号合巻，明治31年9月19日。
- 13) 顕微鏡雑誌局：顕微鏡 第29号，明治32年5月31日。
- 14) 富安歯科治療所：歯学研鑽 第1号，明治32年4月5日。
- 15) 顕微鏡雑誌局：顕微鏡 第27号，明治32年1月30日。
- 16) 顕微鏡雑誌局：顕微鏡 第28号，明治32年4月9日。
- 17) 顕微鏡雑誌局：顕微鏡 第33号，第34号合巻，明治33年3月30日。
- 18) 森山徳長，石川達也，長谷川正康：東京歯科医学院講義録第一輯の書誌学，日本歯科医史学会会誌，14：97-101，1987。
- 19) 顕微鏡雑誌局：顕微鏡 第35号，明治33年5月20日。
- 20) 顕微鏡雑誌局：顕微鏡 第38号，明治33年11月30日。

- 21) 顯微鏡雜誌局：顯微鏡 第36号，明治33年 7 月
3 日。
22) 顯微鏡雜誌局：顯微鏡 第40号，明治34年 3 月

- 28日。
23) 顯微鏡雜誌局：顯微鏡 第46号，明治35年 3 月
31日。